

濾殻による装飾紙の制作 —手製本における利用方法の一考察—

Decorative paper production by Koshigara —A study of how to use in hand bookbinding—

関 典子*・佐藤 光輝**

Noriko SEKI*・Mitsuteru SATO**

論文要旨

漆の制作工程で生じる濾殻（こしがら）は和紙の濾紙で漆を濾して乾燥させたものであるが、その後の利用方法がないためにほとんどが廃棄されている。濾殻で使用した濾紙は漆に染まった和紙であり、その独特な色彩と質感は美しく、廃棄してしまうには惜しい魅力がある。漆器制作の現場でも何かに利用できないかと考えられてきたようであるが、現状では利用方法はごく限られており未開発といえる。

本研究では漆の濾紙を製本に活かせないかと考え、表紙の装飾紙として使うことを試みた。漆濾紙が製本で使われているのは見たことがなく、独自性が期待できると考えたのである。しかし、濾殻はそのままでは薄くて割れやすいため、耐久性、加工性に乏しく装飾紙としての利用は適していない。そこで裏打ちの技法を取り入れることにより、紙を厚く丈夫にして加工しやすい装飾紙とすることに成功した。

キーワード：漆濾紙、手製本、装飾紙、工芸品、地域生産品、再利用、裏打ち

1. 濾殻について

(1) 濾紙の使用法

濾紙とは木地に漆を塗布する前にほこり、ゴミ（漆のかたまり）を取り除くために使われる和紙である。紙を厚く重ねて一度に絞ると、塵が押し出されてしまうため、濾紙は数枚重ねて使用し、数回に分けて濾す。使う枚数や濾す回数は、用途や漆の濃さによって変わるが、一般的に上塗りと呼ばれる仕上げの塗りになるにつれ増えていく。漆器の制作工程における濾紙の使用法は以下の通りである。

1. 濾し紙で、漆を入れる器を拭く。この器は磁器やガラスなど表面がつるつるしたものが向いている。茶碗やどんぶりなどがよく使われる。
2. 濾し紙は器を拭いた面を上にしてのせる。
3. そこにあらかじめヘラで練った漆をのせ、濾し紙を二つ折りにする。
4. 合わせ目が内側になるよう細かく折りたたんで漆

が出ないようにしてから、両手で紙をひねる。少量の場合は手でねじって濾す。必要に応じて数回繰り返す。

漆濾し機を用いる場合は手でねじった後、濾し機にセットする。いずれの場合もいきなり力を加えるのではなく、濾し紙内の漆が垂れ落ちて減ってからねじる。また、垂れ濾し器でひねらずに自然に垂れ落ちるのを待つ方法もある。

(2) 濾紙の和紙について・種類

漆濾しで使用されるのは主に吉野紙、麻布紙、合成紙である。どの紙を使うかは職人や工房によって異なる。

吉野紙

吉野紙は奈良県吉野地方において楮を原料に作られる和紙。薄く柔らかい質感で、漉き具合にむらがあ

* 弘前大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Hirosaki University

** 弘前大学教育学部美術教育講座
Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

る。きわめて薄い楮紙でありながら引っ張りに強く、ふっくらとした紙の地合いが濾過に適しているため、江戸時代以来、漆や油を濾す濾紙として使用されてきた。また白い紙色と柔軟な紙肌から「吉野和良【やわら】」「やわやわ」とも呼ばれ女性の懐中紙としても愛用された。¹

麻布紙（あざぶがみ）

山形県上山市高松産の和紙で、吉野紙の製法が伝わったものである。原料は楮、手漉きで作られている。麻布紙の名称は原料の楮を水晒しする時、麻の布に包んで晒すことから、麻布紙と呼ばれるようになったものである。² 漆漉しでは吉野紙と同様に使われる。

新吉野紙

レーヨンとパルプが含まれた合成紙で、機械漉きのため材質が均一である。和紙に比べて長期保存では品質が低下する。吉野紙に比べ安価のため広く普及している。使用方法是他の和紙と同じである。

渋引き紙

吉野紙・麻布紙を柿渋に漬けて乾燥させ丈夫にしたもの。漉し紙を重ねる時、外側に重ねて使う。漉殻で代用することもある。

(3) 現場での漉殻の扱い

漉殻の利用は漆漉しで見られる。漆が乾かないうちは器物のほこり拭き等に使用する。一度乾燥させたものは渋引き紙と同じように重ねた漉し紙の外側に使う職人もいるが、それ以外の用途はなくほとんどがそのまま廃棄されている。制作現場の漆職人に話を聞くと「もったいないので何かに使えないか」という気持ちを抱いている方が多い。しかしこれといった使い道を見つけることができず、保存や管理に手間がかかるため、漉殻の利用開発は進んでいない。

(4) 既存の利用方法

現在確認できた利用方法は以下の通りである。

箸置き：漉した時のねじった形をそのまま生かし、乾燥させて短く切ったもの。（輪島塗しおやす漆器工房³）

裂織り：漉殻を細く裂いて織物にし、コースター、財布、名刺入れ、札入れ、トートバッグに加工している。（漆 de 織／芳賀紀江工房⁴）

紙小物：カード、ぼち袋、便箋を制作、販売してい

る。（漆こし紙でつくるポップアップカード、こし紙ぼち袋／安比塗漆器工房⁵）

和本の表紙：漉殻を開いて乾燥させそのまま表紙に使用。（漆漉し紙の和装本／縄文社⁶）

アート作品：紙による立体作品の素材の一部として使用。（石渡真紀⁷）

2. 装飾紙としての利用と加工

(1) 製本への展開

工芸製本⁸では、表紙や見返しなどに貼る装飾紙を作家が自ら作ることがある。装飾紙は絵の具や染料で染める、コラージュするなど、本の内容に合わせて制作される。工芸製本における装飾紙は作家の個性を表現する場面でもあり、作品全体の印象を左右する要素でもある。

装飾紙の制作には、薄い和紙を貼り合わせ、コラージュする技法がある。特に典具帳紙と呼ばれるごく薄い和紙を重ねると奥行きが生まれ美しい装飾紙を制作できる。本研究では漉殻も元は薄い和紙であることから、同じような装飾紙が制作可能であると推測した。本の表装材として革や紙のほか、木・金属・プラスチックなど様々な素材を用いて表現を試みる作品も多数見られるが、漉殻を利用した作品や装飾紙とする例は今まで確認できていない。手製本作品に漆を取り入れることで、工芸品としての美術的な価値、表現の独自性を得られるのではと考えた。

(2) 裏打ちについて

漉殻は乾燥後に薄く割れやすいという弱点がある。本研究ではこの問題を解決するために裏打ちを施すことにした。裏打ちとは紙や布などの裏に、別の紙や布をあてて補強することである。薄い紙や布が厚く丈夫になることで、切る・貼るといった加工がしやすくなる。主に表装で用いられる技法であるが、製本においても和紙や表紙布の裏打ちがよく行われる。紙は湿らせると伸び、乾くと縮む。この性質を利用した技法である。乾いて縮もうとするとときに、張り付けられていることで引っ張られて紙が伸びるため、シワが生じないのである。なお裏打ちの「打つ」という言葉については、湯山治美『表具の技法』において、“紙を水糊で打って（張り付けて）乾かし、シワなどが出ないようにピンとした状態にします。”とあり、「打つ」ことは「張る」意味と説明している。⁹

(3) 漉殻の事前準備

濾殻を装飾紙の素材として利用するためにはあらかじめ準備が必要である。濾殻は通常ひねった形のまま捨てられる。固まってしまうと開くことができない。そのため濾殻の提供者である葛西彩子氏¹⁰に、濾した後に開いて乾燥させるようお願いした。濾した際に付着したゴミ（漆のかたまり）はそのまま利用するため取り除かないでおくことにした。また、濾殻装飾紙の試作を繰り返すなかで、濾殻によっては裏打ちに向き不向きがあることが分かった。漆の皮膜が厚く、和紙の繊維が漆で埋まっている状態だと、接着剤（木工用ボンド）がはじかれてしまい上手く接着できない。裏打ち用紙に貼りついていることができず、乾燥後はがれてしまう。和紙の繊維が見える程度であれば、接着剤が絡むので貼り付けやすい。そこで濾殻が乾く前に、新聞紙に挟み余分な漆を移し取ることにした。この一手間により、接着性が上がり裏打ちの成功率が上がった。本研究では吉野紙と合成紙の両方の濾殻を使用した。接着の違いは見られなかった。

(4) 濾殻装飾紙の作り方

用意するもの

濾殻 適宜

裏打ち用紙 四六判100kg～130kg程度の紙

ベニヤ板（12mm～15mm厚）または木製パネル

水張りテープ

でんぶん糊

木工用ボンド

刷毛

水

スポンジ

ワックスペーパー

プレス機（なければベニヤ板とクランプで代用）

板

制作手順

1. ベニヤ板に紙を水張りする。紙の両面に水をつけて紙が伸びるまで待つ。
2. 水張りテープで四方を貼り付ける。半日から一晩、乾くまで置く。
3. 水張りした紙の上に、濾殻を乗せてレイアウトを決める。
4. 裏打ち用紙全体に糊ボンドを塗布する。糊2に対し木工用ボンド8の割合で混ぜた接着剤を使用。木工用ボンドを水で薄める代わりにでんぶん糊を混ぜる。でんぶん糊の粘り気と水分で乾燥を遅らせるので、貼り付け作業がやりやすく

なる。多少の盛り上がり、筋が残るくらい、気持ち多めに塗っておく。

5. 濾殻を乗せ、しっかり貼り付ける。この時、繊維の間から糊ボンドが浸透するように手で圧力をかけながら濾殻を押さえながら貼る。重ねて貼る場合は、一枚ごとにきっちり貼る。繊維間から浸透し、濾殻の上に出てきた糊ボンドを手で染み込ませるつもりで伸ばしながら、余分は画面の外に出す。最終的に濾殻の上に糊ボンドの溜まりがないようにする。
6. 完全に乾くまで半日程度置いておく。
7. 乾いたら板から外す。濾殻が大きく浮いていればボンドを付け足して、再度乾かしてから外す。乾燥させた紙は大抵波打って部分的に浮きが生じていることが多い。ボンドの接着力だけでは貼り付かず、漆の塗膜に弾かれているためと思われる。
8. 水張りテープを切り落とす。
9. 紙全体を軽く湿らせる。スポンジに水を含ませ、上から軽く押さえるように湿らせる。余分な水は手ぬぐいで押さえて取る。
10. ワックスペーパーに挟みプレス機で圧をかける。はじめは強く圧力をかけて30分～1時間置く。
11. 一度取り出して確認し、余分な水が押し出されていたら拭う。
12. 圧力を若干弱めて紙が8割がた乾くまでプレスしておく。
13. 全体に水気が感じられなくなったら、ワックスペーパーと板に挟んだまま、1kg程度の重しをのせ、完全に紙が乾くまで半日以上置いておく。

プレス機がない場合は、板とクランプで代用できる。プレス機を使用するときと同様に、紙に湿り気を与え、ワックスペーパーに挟みさらに板で挟む。周囲をクランプで締めて圧力をかける。クランプが目一杯締まるころまで強く締めて30分～1時間、一度取り出して紙の状態を確認し、8割がた乾くまで挟んでおく。全体に水気が感じられなくなったら、ワックスペーパーと板に挟んだまま、1kg程度の重しをのせ、完全に紙が乾くまで置いておく。

接着剤だけでなくプレス機の圧力によって、濾殻がしっかりと貼り付く。水分を与えることで紙全体が伸び、濾殻の多少のシワや浮きはここでならされてなく

なる。浮きやシワのない、一枚の紙に仕立てるためには圧力をかけることが重要である。

3. 手製本における実践

2015年6月にギャラリー CASAICO において「交差式製本¹¹によるノート制作」のワークショップを行った。この中で濾殻装飾紙を手製本の表紙への利用を実践した。二枚の表紙を背で交差させ綴じる製本方法のため、表紙の一枚を濾殻装飾紙、もう一枚は黒色の厚紙で制作した。濾殻装飾紙はすべて色や模様が異なるため、制作人数より多く用意しておき、ワークショップ参加者が選んで使用した。

実際に制作し確認できたのは、漆の素材感、質感が生かされ見栄えがよく美しいことである。一見すると革のような重厚さを感じることができた。制作には折る・切るといった工程を含んでいたが、画用紙程度の厚さ・硬さで、普通のハサミやカッターで問題なく加工できた。短所としては、折り曲げに弱い点である。濾殻に厚めに漆が付いている箇所は折目で微細な割れが見られた。濾殻装飾紙について、ワークショップ参加者からは「面白い」「きれい」といった外観への反応のほか「濾殻は何でできているの?」といった素材への興味が寄せられた。濾殻の実物を見せ、濾殻が漆器制作によって生まれるという背景も合わせて伝えることができた。参加者は津軽地域在住の方ばかりであったが、濾殻は知らないとのことで製本と漆の両方に興味を持ってもらう機会となった。

ワークショップ主催者である葛西彩子氏からは次のような意見を頂いた。「濾殻の有効活用として、製本を生かしてノートやメモ帳など雑貨として製品化が期待できる。素材としてだけでなく、完成した装飾紙そのものを作品として展示・販売ができるレベルに達しているのが素晴らしい。」

工芸製本の観点から見ても、今まで製本では扱われなかった素材であり本物の漆の質感が魅力である。装飾紙作りも製本における表現の一つだが、濾紙を切ったり裂いたり、重ねて奥行きを出すことも可能であり、濾した際のゴミやシワもアクセントとして定着している。さらには一般的な手製本での革を用いた技法との取り合わせも可能であると考えている。

4. まとめと課題

濾殻は本物の漆に染まった紙である。漆器制作過程で出る廃棄物だが、漆に染まった和紙の質感の面白さや美しさを活かすために、装飾紙としての利用方法を

本研究において考案した。裏打ちおよび製本で培った技術と合わせることで、新たな利用価値を見出すことに成功した。

今回は製本ワークショップに限定し、濾殻装飾紙を制作・使用したが、今後は紙小物や雑貨等、他の形で活用も検討したい。濾殻装飾紙を折り曲げた際に見られる割れについては、濾殻に残った漆の量を調整する以外にも、工夫の余地の有無について探究することが今後の課題である。また、濾殻の入手には漆職人や工房の協力が必要である。濾殻を広げて乾燥させ、裏打ちを前提に濾殻に残った漆の量を調整してもらわなければならないため、本来の作業以外に時間と手間がかかる。裏打ちするための道具や設備、技術が必要で大量生産は向いていないのが現状である。しかしながら、大量生産できないことで工芸品として価値を高めているという側面もある。本研究で制作した濾殻装飾紙は、漆器という工芸品から派生するものであり、濾殻をコラージュした一点物の作品として希少性を持たせることも可能ではないだろうか。青森県は津軽塗の産地であり、その現場から生まれた素材を用いることで地域性、独自性が打ちだせる。漆器とは違った形で、身近に漆に触れるきっかけにもなる。

漆は天然のものであり、今も人の手により採取されている。いくつもの精製作業を経て塗料として使えるようになる。その労力を考えると濾殻を破棄したくないという気持ちはもつともである。現場の職人たちの「もったいないので何かに使えないか」の声に応える一つの方法として、さらに研究を深めていきたい。

謝 辞

本研究を進めるにあたり漆に関して多くのご指摘を下さいました葛西彩子氏、斎藤和彦氏に感謝いたします。

参考文献

- 佐々木英 (1986) 『漆芸の伝統技法』理工学社
- 社団法人日本漆工協会 (1987) 『日本漆工 日本の漆工其の一 材料と用具』
- 社団法人日本漆工協会 光芸出版社編 (1978) 『うるし工芸辞典』光芸出版社
- 湯山治美 (1982) 『表具の技法』株式会社日貿出版社

参考資料・URL

- 石川県産業創出支援機構
- <http://www.isico.or.jp/soshiki/shigen/catalog-haga>

¹ 文化遺産オンライン

<http://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/21555>

漆濾紙（吉野紙）製作、うるしこしがみ（よしのがみ）せいさく（2016年6月1日）

² 社団法人日本漆工協会、『日本漆工 日本の漆工其の一 材料と用具』、昭和62年、62頁

³ 輪島塗 しおやす漆器工房 石川県輪島市小伊勢町日隅20番地

⁴ 芳賀紀江工房 石川県金沢市弥生2-6-11

⁵ 安比塗漆器工房 岩手県八幡平市叭田230-1

⁶ 漆漉し紙の和装本

http://www.handmadejapan.com/sidestory_/sst240_01.htm

⁷ 石渡真紀 <http://makiishiwata.com>

⁸ ルリユール（reliure＝フランス語で製本という意味）ともいう。ヨーロッパ中世から続く手仕事による製本。

⁹ 湯山治美『表具の技法』株式会社日貿出版社、1982年、55頁

¹⁰ 漆職人であり、ギャラリー CASAICO オーナー

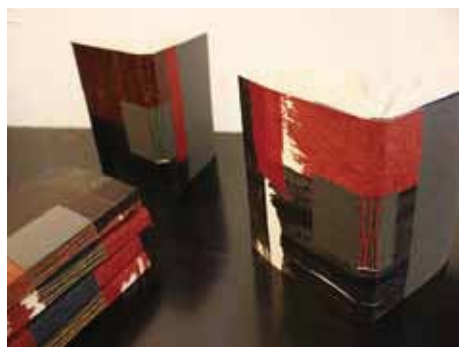
<http://www.casaico.com>

¹¹ 1990年代イタリアの製本・修復家カルメンチョ・アレギ氏により、本の保存を考慮して創案された製本方法。

（2017. 8. 8 受理）



1



6



2



7



3



8



4



9



5

1. 濾し器で漆を濾すところ
2. 乾燥した濾殻 3. 濾殻装飾紙
- 4～6. ワークショップの様子と完成した手製本
7. 裏打ち用紙に濾殻を貼り付けたところ
8. 裏打ち後、プレスをかける前
9. プレス後、圧力により濾殻の浮きが解消され均等に貼り付いた状態